



高野山開創  
1200年

管長さんの年頭あらわし

高祖大師の御徳かがやきて



高野山真言宗第413世座主中西啓寶大僧正  
平成26年11月15日晋山

祖山高野四郎の除夜の鐘が厳かに響き渡り、平成二十七年乙未の静寂な新年を迎えました。高野山にとりまして、ご開創千二百年記念大法会の瑞湧この上なくおめでたい年の幕開けでもあります。

明けましておめでとうございませう。年頭に際し皆さま方のご多幸と無事平安を心よりご祈念申し上げます。

この度、高野山真言宗管長・総本山金剛峯寺座主にご推挙を賜り、浅学不徳を顧みず重責を継承させていただきましたことと相なりました。ご芳情賜りますよう心よりお願い申し上げます。

大法会を厳修するにあたり、全国の本宗寺院ご住職、寺族、檀信徒各位をはじめ各機関、各方面より絶大なご協力ご支援を賜り、中門の再建、諸種の記念事業も順調に進捗していますことは、誠にありがたく心より甚深の謝意を表します。

お大師さまは若き頃、仏法の真髓を求めて唐の都長安（現西安市）に渡り、師の恵果和尚より「遍照金剛」の号を賜りました。「遍照」とは真言宗の根本のご本尊である大日如来をあらわします。

私たちが日々「南無大師遍照金剛」とお唱えして、親しくお大師さまに帰依し、救済を願うみこころの原点はここにあります。

この号を得た由来は『御請来日録』にあるが如く、お大師さまが恵果和尚より灌頂を受けられたとき、曼荼羅に投じた花が二度も大日如来の上に落ちた事実によるものです。大日如来は全宇宙の生命の根源であり、「南無大師遍照金剛」と御宝号をお唱えすることは、大日如来と一体となつたお大師さまの御徳かがやき、大きな功德となって遍く照らし、私たちに降り灌が



←天保九年(1838)絵図にみる中門が焼失する五年前に描かれた絵図です

加蓋金堂正面の手前に中門が建っていたが天保十四年(1843)九月に焼失して以来、約一七〇年間、礎石のみを残していた。平成二十七年高野山開創一二〇〇年記念大法会を執行するにあたり、記念事業の一環として、平成二十三年から中門の再建が始まり、現在ほぼ完成しています。

誓願は、この世に永遠に留まって人々を救済する利他の菩薩行を続けるということにあります。

私たちがお大師さまの報恩行として朝夕に真心をこめて御宝号をお唱えし、来る四月二日の大法会の開白をお迎えさせていただきますましよう。

皆さま方には、おそろいでご登嶺賜り、五十年に一度の大法会に参じられますことをお願い申し上げます、新年のご挨拶といたします。

高野山真言宗管長

中西啓寶

れることでありましよう。

「有り難や高野の山の岩陰に大師はいまだ在しますなる」（弘法大師御詠歌第一番 慈鎮和尚作）お大師さまのご